

和田節定編輯

開明小說

春雨文庫

第四號

上





A 416  
7

010190509481

梅亭金鴛閣  
和田定節編輯

開明  
小説

# 春雨文庫

東京書肆文永堂



春雨文庫四編序

父乃恩おん々ん春雨文庫あめ、は松村先生まつむらの筆ひつ

意い可い生い々い二蓋ふた之の蓋ふた葉はをを重かさぬか也なり

四輯し乃の發はつ見みと待まちて彼方あつち中なか才さいで五葉ご々ん

よ以よ過つと浦うら水みづ磯いそ列ら松まつ先さき唐たう崎さき乃の高たか碑いしぶみ也なり

惠めぐ之の受うけるる夜よ水みづ雨あめ、は四よ時じの常とこ盤ばん也なり

地主

八背

48-7525



極きまひひかくかく臺たい出す出す部ぶ負りののふふ代よ之と州ぐさ  
弄ひひひてて之こ保ほのの羽は衣い小せう作者さくしやがが草くさ々々綾あや錦きん  
硯すゐり下か流ながすす任す吉きちいい世よ相あ生い生せい時とき留とどと  
計しりり落おち葉はとと昔むかしにに播は出だされれしし老らう捕とら  
大だい人にんがが健けん能のうのの妙めう案あんヤヤンンヤヤののおお新しんとと侶りょ  
偶ぐりり書ふ屋こがが鼻はな音ね高たか妙めう松しょうのの歌うたひひ



文ぶん永えい守しゅりり聖せい詔みことこと書しよ花はな入い大だい島しま島しま乃の  
厨しゆ之の坑くわ之の百ひゃく部ぶ言言九く千せん九く部ぶとと子こ  
余よ了りょう乃の看かん書しよ法はふ天てん日ひ毎まい之の陪はい陳ちん法はふ江かう又また  
只ただ管くわん之の願がん子こ希きふふとと似にももせせぬぬ業ごう林りん乃の通通天てん  
色いろ迷まひひ色いろ  
四し治じ十じゆ二に年ねん  
初はつ冬とうのの日ひ  
井い住じゆ屋やのの安あん活かつ  
桂けい生せい述じゆつ







藝妓小常



解やす記  
こまおの  
等也  
春は香  
樂心

横田清兵衛





春雨文庫第四編卷之上

東京 和田定節著述

第十二回

人の心も和らぎ一花の都の繁華の地彼藤村の  
 妾宅の小常が許さ今日もまたと呑明一たる田原  
 屋清兵衛常香と相手にうち戯れ酒ふるつへ  
 るりりけり清酔さ今日の様ふ心持よく酔



とこの祓へ如何どうと小常こつね一あひつ相あひと一くれと呉くれねへり  
ハハお間あひを志まませうが其そのかたより此この猪口ちよハハと  
いの方ほうへ預あづりつて置おますヨ何なん故ごといるせし言こと  
て夕夜ゆふへりりの吞のつゞけで何なん程ほど好すむお酒さけでも夫それ  
トヤア身み躰たぐふあとりますううモウちつと酔よひと醒さま  
して开ひいてお飯まんまとお食ありるをいす一清ニ飯めいと食く  
と情なさけねへと残のこいみるア此このうへ阪やが食くれるもの  
うハ飯まんまが否いやあう何なんでも外あよおまおんの好すむ物もの

春雨四十二

と進あ申げすうう宜いむものとお好このむなをいす一清巴おれの  
好すむものと言いはしう巴おれの好すむものるら酒さけと小常こつね  
ど一香何なんトやいる其その酒さけが悪わるいふようう余よのりめと  
小常こつねさんがお言いひのどおアホ清くモウく飯めいハ真ま平びらど  
何なんよりろ小常こつねその猪口ちよと鳥渡ちよとく返かえして呉くれろ一清イエ  
かへりません是これと進あげると又またお酒さけと給ありますう  
ら一清意地いぢのころい女子よんなどナアよく夫それるらバ己おれも  
ま一清和女わにょ達の好すむものを買かうて遣やらうマア酒さけを



呑のまいて呉くれろヨ小其様そのんふお言いひなさらるらざんえん随分まじお酒  
と呑のまいそ進あがまほそのん其替かり私わたしいどもの好すきる者ものと  
屹きやう度と買かうてお呉くれなさらるへ清買かうてやるともく相違さうい  
るく買かうて遣やるらる其猪そのちよく口くちとマアこつち此方こつちへ小イい、エえままと  
何なんとも極きまるいらちこのちやうへ此猪このちよく口くちへ返かえりません常香つねかうさ  
ん何なんと極きまとが宜よろらる香へ香左様さやうさねへ池洲いけすの會かい  
席せきも芳味ほうみないい其様そのんなりのあり何ぞ珍めづらしい  
りのいるいり香へ香夫それなら誰たれぞ太夫衆たゆうしゆうと呼よんで

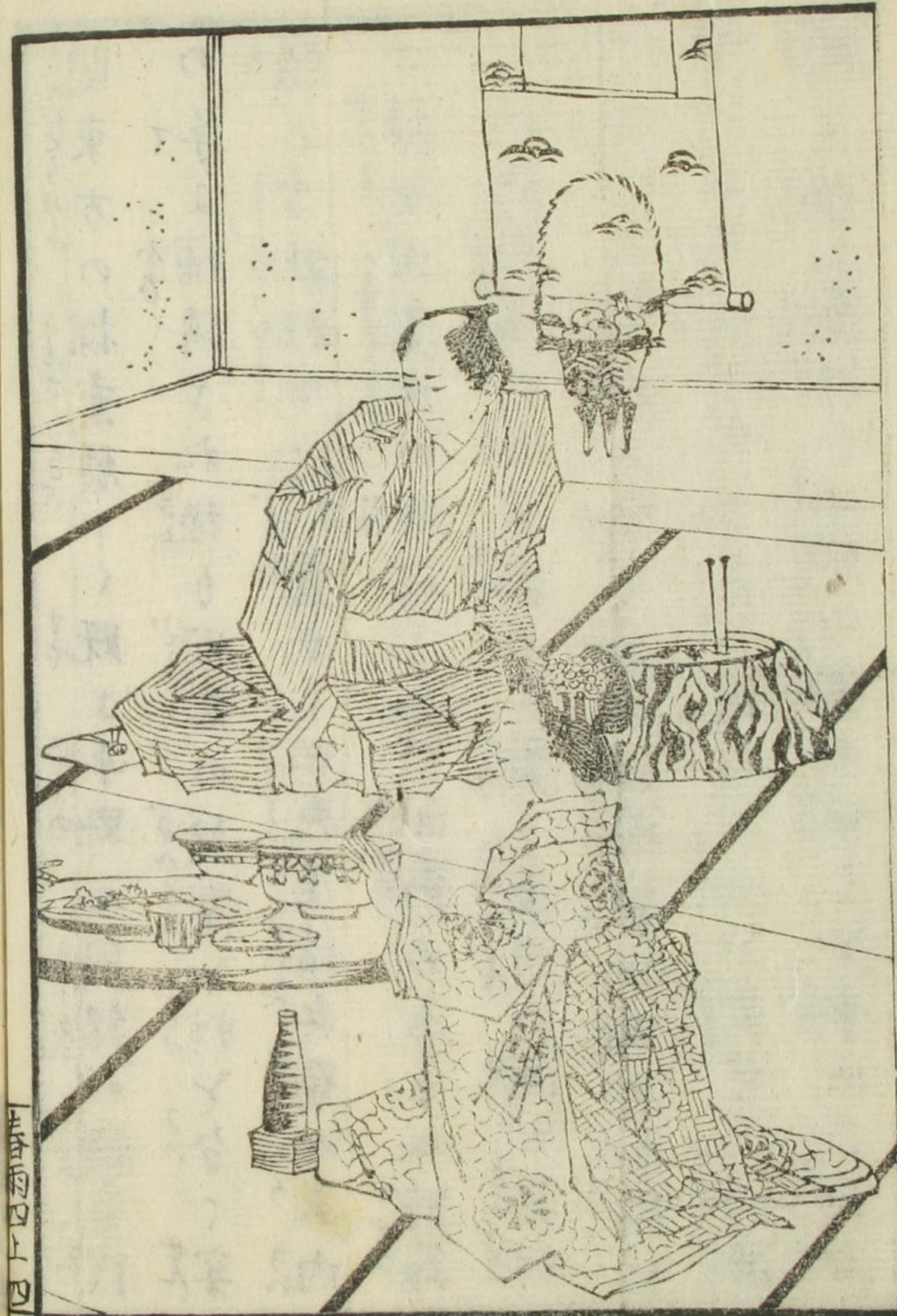
一段いちだん聴きが宜よろらる小江戸えどうら登のぼつと藝者衆げいしやしゆうの藝げい  
事ことが面白おもしろひウこれイいヤや夫それよりしやうの四條南しやうなんの芝居見物しばいけんぶつが  
宜よろでいる香いそのとろこつね其事そのことく小常こつねさん夫それふ極きまるが  
よいい小且ぜん那なさん夫それも芝居見物しばいけんぶつと屹きやう度とも  
るいそお呉くれなさらるへ清エえアあ滅法めつぽう界かいとと吐ま出でいと  
る宜よろいちつと散財さんざいどが翌日あすの終日しゆうじつ見物けんぶつさせやう  
然しかし已おれの用事ようじが有ありりよけんぶつ見物けんぶつの出来できるいか  
ら常香つねかうと常鶴つねづると爰こゝの家いえさんと誘引さそひあひか合外あひかよ



誰ぞ男と連て行事とするグよい「嬉しくひく明  
日ハ芝居の見倦とせねばならんこいゝ「まゝと餘  
まりおづんで常香さん俳優又見惚て棧敷の階  
子と落んやうに志多さんセマあ「何卒己も早  
く用事と片付て跡うう行て見物「といガ芝居  
よりも此方の狂言どうう人目み掛らぬ格又  
「何さ餘り人の込合ふ中の櫛笄と氣と付ろと  
りんとヨト言紛らせど此頃の世間の嗜又違はず

關東方の探索嚴しく既平野の同銘ハ諸司代  
の手は捕縛され猶も同志の殘黨と艸と分て穿  
議と安桂村田へ同意せ「田原屋清兵衛が家内  
の様子探索方の付移へハ油断のあらぬ時節  
といひ同銘の士と窺う量り長州の地へ落行  
て志多「彼所ふ身と忍び好機會と得て手術ハ  
あらしんと儲こそ有志の面々と心と合せて清兵  
衛も俱は落行く心組小常の好と幸ひ又明日







の芝居も最愛の名残と惜む別れ路の心むろ  
りの賤別と知らぬ小常のいぢりこつね且那夫かんま  
下へ毎度ゆく茶屋の南の江戸屋下でございませ  
子清さう左様とも江戸屋の古ひ懇意と故粗末なと  
の志まひくく江戸やうう性せうがよい己も用事の  
暇さへ明あけばるるけ早く行つりうと夫それく連  
てゆく男をとこの誰これよりたらし宜よくらうる馬幸まこうの坐敷  
で閑ひまが有あるまいヲ、丁度いひ終屋の寅吉と叫よ遣やつ

て連つれてゆけ「ホンニ噂うわさふ陰かげとやう今終屋の寅さん  
が下坐しござしきで声こゑがーと常香つねかうさん鳥渡ちよつとえて来きく  
お呉くれでまい「アイト常香つねかうの氣きも軽かるく下座敷へと  
降りおりて行跡ゆくあとみ清兵衛せいべゑへ小常こつねみ向むかひ「狂言きやうげんといふ者もの  
の面白おもしろく仕組しぐんどりの下忠臣藏ちゆうしんざう千本櫻せんぽんおう其外そのほか世話せわ  
の道行みちゆきりのと一々いついつ筋立すぢたての替かれと結局けつぐうところ  
の忠信ちゆうしん孝貞かうてい勸善くせん懲惡ちやうあくと題だいみして人の教おしへの早はや  
學問がくもん其そのうちみも天神記てんじんぎの菅丞くわんじやう相道さうだう実公じつこう勤王きんおう無な



二の忠臣も朝廷と軽蔑する倭者の為小退けられ  
遂に遠流と成るさきと心のうち何様  
口惜ひと有らう昔も今も世の中不免角  
倭人が跋扈し我意の權威と恣まに勿体  
なくも天朝とありがらよするのそまらざる精  
忠の勤王者の根を断つて幕イヤ下りるの時平  
の壓制虎の威とかる野狐ども憎しとも残念と  
も言よも言れぬ的等が我尽夫又付ても是迄に

心を尽し同志と暮ら古主へ忠告るされしも  
却つて己身の害とあり思ひかけなく捕縛の身  
と成るされと平野様イヤサ道実公土師の里小  
の玄姫君やうりやとつゝ姫もあり翌日の筑紫へ  
流罪とる門出と悲しむ二段目の子別れ場の  
和女も定めしんとてあらう丞相程のお方でも  
恩愛別離の悲しこの我輩も同ト仁左工門が  
管丞相で花道の引込ハア、よろつとぞくと夫と言







出来たら跡々でも行こし仕振あうマア鬼  
も角も万事貴公不取扱つて貫ひてへのど其  
儀も承知いとしましと寅さんお頼と申しまは  
よ合点ハテ何事も宜ういのウト  
「夫の誰の似声とへ誰と言て葉村屋の生うつ  
第一声色へともあれ顔が我童延雀と搦交あり  
若手の右團次と老功の多見藏と細末ありて衣に  
掛ととり美男どのふ可ヤ其顔がうへヲあ  
清

いつも相替らず能元氣で浦山いナ此頃ハ宜花  
主でも足付とくイエモウお得意どころでいひさ  
いません毎日空然遊んでむりり居ますが然  
其うち又宜夏が有どらうと思ふのいよく関  
東御上洛も近々と決定しと吐しと岐ま  
たりと夫さへあれは随分まの懐中の工合が替  
りまはる今仕度あて置積り下むぎい外  
清  
「そんなる評判み違ひなくいよく御上洛み成





のりノ「マア左様いふとでございます」ハテナアト  
 何う心ふ一ト思案幕府が上洛ある時の益々群  
 る大小名関東へ荷擔する者多かるべけきとバ  
 勤王の武士の皆深淵に臨む如き時々の故片  
 時も猶豫の成がと一と千々ふ心と痛めたり

第十三回

逢ふとの絶しををるくみ人とも身とも然と  
 ざらまゝ一且邊吉太郎の江戸へ往きとる戻りが



け生麦なまむぎの松原まつがらみて外國人がいにんふ捕えられ難儀なんぎして居ゐけ  
お梅うめと計はからず助けたすけさるより乳母めのとが家いへふ雨宿あまやどりま  
幼稚わさなき時ときの友ともたると知り互あひよ積つる古郷ふるさとの話はなし一夜よるの  
雪ゆきあゝぬ茅うやが檐端のきぶと漏もる雨あめ濡ぬれ嬉うれしき夢あめの間まと  
東雲あづのくも告つる鶏鐘とりかねの憎にくきとつゝと覺おぼえ初はれど吉太郎きちたろうへ仕つかへ  
の身故このみ人目ひとめと厭いとえべ明あぬうち別わかれくよ立たち出でてその住すまむ  
家いへへ戻かへりくり斯くてお梅うめへ吉田町きちだまなる松まつ下亭したていに居ゐり  
渡辺わたべ吉太郎きちたろうへ辨天べんてんの境内けいんの官宅くわんたくふ在あれ志こころ勤いその暇ひま武ぶ

春南四上十

術じゆつの誓ちか古ふるの相間あひまふの松まつ下亭したていふ来きり一酌いちしやくと催もし忍しのび  
くよお梅うめふ逢あふお梅うめへく吉太郎きちたろうへ来きるとの朝あさ  
る夕ゆふるお待まちこびて深ふかき中なかとの成なりくるるり然されの  
お梅うめへ今け日ふもますと吉太郎きちたろうが来きるると二階にがいの手て  
摺すりふ身みと持もて表おもてのかとと見みて居ゐると後うしろ方はたりり拔ぬけ足あし  
で徐そと来きるる此家このいへの酌しやく女をんなお松まつあり空然うつろして居ゐるお  
梅うめの肩かたへこッつと言いひつ捕とまるとお梅うめへ怖おそりつ「オー」  
誰たれとれ人ひと肝きんと潰つぶさせてサと振ふり返かへりつ「アー」お松まつさん



と憎らうい覚えてお在松「オホ、夫でもアノ誰やらの  
勺又志さんと為れを又撞く秋の鐘と言ふのが有と  
が今ハ春の夕アとくう半日ぐらゐ顔と見るいと言  
て手摺又憑れ弁天の方をかり詠て居るこゝの餘うど  
と思ふかゝ生の付く様又為て上とのどワ「オヤ松ダ  
何時弁天の方を詠めて居ま」と言ふ中よ横  
目で東の方へ見當と付けて居るくせよ何時詠めま  
しともいれんど「アア彼とりのヲ憎らうい昨

日も話す通り豆辺さんの吾儕の手習の相弟子でッ  
組や一きどから別段お心安いんどと言とら林へ  
松へ一ツ手習のお師返さんどから色のいろはを教え  
てお世貰ひのどらう「アア澤山持んるを言ておい  
ぢめお前の事も左様言てをるうう「何どらう腹  
の中での請賃を払しても恍惚言ひとく又言れと  
く思つてお在のくせよ偽せ腹と立てさヨ誰も居る  
いから徐々と彼の人のおとを言て上るのよ不知と切



てサ憎らしいねへト言ふ時下と通りかゝる外國人  
がふ梅とお松を見て「貴嬢好べゑ有りますすう水姓  
ペケノ」トオヤあれ此間來と百八番の商館のど子  
梅「何ぞう吾儕もやアまど皆る同る」やうる顔又見  
えて空然譯らるゐワ「オヤ」今の異人で思ひ出と  
実の夫とお前さん又話す積りで二階へ上つて來と  
忘れとんどヨ彼の子それ生妻でお前さんと捕えと  
ト言てお話しの英の商館のチヤアポンの夫ツきり

此方へ來るゐと思つたら軍艦ふ乗りこんで薩广  
へ合戦ふ往て去まつとのどツさオヤア嬉しい來ら  
れたら何様ぢやうりト夫から以來毎日苦勞みして  
居とのどワ有難い秘へ「真正の薩广へ往て豚ふ  
食れても仕舞やア宜い彼様々氣障る異人」  
いのどヨどがお梅さんの為のチヤアポン異人大明神  
どワ「オヤ何故どエ」夫でも彼の異人のチヤアポンふ捕  
えられとく「且邊さんふお逢のどと言ふで」



梅 それ 夫の左様どが一旦辺さんふお目み掛つとツてチヤ  
アボン大明神だいのめうじんでも無いぢやアあいのう松らんふチヤアボン  
結ぶの神くむで右つと移人梅「オヤ其様ふ人ひとといぢあると  
承知しやうちあるのワとお松と捕えんと為るお松の遊る二  
階うゐの下り口階子の段と上りて来るの立込姿の武  
士二人お松の其俣腰と屈め「お出遊いであそをせ此方のお  
座敷ざしきが宜よろうございますト奥の一間へ案内すれ  
お竹たけが下から持上る茶煙草盆ちやえんそうばんふ敷蒲しきふしの續つづい

て後あとから盃洗さらいせんふ徳利とくり盃さき一二種の座ざつきの肴さかなも出  
けれお二人の客の盃さき採りお松まつが酌しやくと為せらぐら酒  
と飲のこつ話わすやう「何なんと雲田先生くもたせんせい方今の模様と  
如何思いかにおもへぬす當港とうこうなどお居て「夫程それほどお存ぞんぜぬ  
が西京さいけいの景況けいけい下へ迎むかへ無事むじふの濟すますまの實じつふ  
困こまつとりののでお坐る「何様畑野君のお見込みことの  
如ごとく騒動さうどうが起おこらずお居りますまの如何いかにとまれ  
お世界せかい万國ばんこくの景勢けいせいの往昔あきと變かりくと知らず井



の中の蛙うぐわひひ齊いき諸藩しよはんの徒とグ尺我さかグ自國こくの規則きそくの  
とと唱なえ攘夷じやういの鎖港さこうのと駿さぎとて日ひふ拵たの黨とう派は  
と集あり當横濱港とうよこしまこうとも襲おそむんと為するの催ひり有ある程ほど  
るれ本京都きやうとの混雜こんさつの實じふ本察さつしちうす相愛あひらず薩さつ  
長土ちやうとがその先達せんたつるるりので法座ほふざいまれり細只今ただいまの  
ところでの長ちやうの勢いきひま甚まど盛さんで土人とじんの暴行ぼうこうは  
とふ次つぎ薩人さつじんの却くわつて尊大そんたうふかまいま未確いま乎うる色いろ  
の現ありさずと雖いも其藩士そのはんしのうち西郷吉之助さいごうきちのすけ中村半なかつむら  
半

次郎じやうらうらの如ごときまに就中魁首しゆちゆうきしゆとまり関東くわんとうと倒たさんと  
為なるの始計しやうけいさうんの由よしりて九州きゆうしゆうの諸藩士しよはんしこれふ  
煽動せんどうされ京師きやうしふ入り込こみ來きり或あるひの公卿くぎやうの從臣じゆうじんと  
暗殺あんさつしまつて足利將軍あしかがしやうげんの木像きざうの首くびと斬きり制せいし止と  
めんと為なれども暴徒ぼうとの黨とう多おほくして守護職しゆごしやく所司しよし  
代しろとりくども漫まんり又手てと下くだして是こゝと倣なし難がたし因よて  
先刻せんこくも本話ほんわし申まうしまる如ごとく時田相模守殿ときださうもしゆどのと頭かぶと  
して京都見きやうとままり組ぐみと言いふりのと彼かの地ちふなき



攘夷鎖港と唱へく世の中と強ぐは暴行の浪士輩  
と捕えさせんとす然れども當今み至り劍槍み闌  
たる士い所々の護衛み遣われ明手の者少し只この  
地の金武場の江戸の講武場み次で劍槍み勝れよる  
みの多しとす因て劍槍の教師み用おべきりの七  
八輩と當港よりして是非とも貫ひ請け京地へ移  
さねば禁庭の御警言衛が備たり立ぬるり因て京師  
へ微すべき人名のうち江戸の講武場み於て牛若御

曹子と賞せられよる渡辺吉太郎のかねて頭相摸守  
も講武場にて彼の教授と得しと有る故年若とい  
へども業前み於ての老練の者も及むざるを知り  
なれを是非とも神奈川奉行より貫ひ請け連  
れ来るべしとて居坐るとの話に此方の坐しきみ  
居るお梅の耳へ不斗をいりお梅の一日逢ぬさへ案  
トて物の手は附ず彼処の空のそ詠め居ると若も  
京都へ微し出され彼の地へお出な成るやうな事よ







成なりとらどう何様おぼせうおぼト思おぼへおぼを胸むねまおぼづおぼ裏うらきてハツおぼと  
斗たりおぼよおぼ逆上のりあおぼぐるおぼと息飲いきのと込こんおぼと落おちつおぼけて隔へだ  
の方かたへ摺すりおぼよりおぼツ猶なほその容ゆる子すと窺うらぐおぼへおぼを彼方あつち  
の二人ふたりのおぼだおぼんおぼくおぼ不迫せまるおぼ話わのおぼ高調子たかてうし否いな畑野君はたののきみ  
のあおぼみおぼせおぼでおぼ有あれおぼと沔ひし承知しやうちのおぼ通とりおぼ英えいの軍艦ぐんかん薩さつ  
州しゅう不迫せまりおぼ彼かの藩士はんしと戦争せんそうふおぼ及およびおぼよりおぼ江戸屋えどや  
きおぼよおぼ在あるおぼ薩藩士さつはんしらおぼがおぼ當港とうこうの異人館いどんかんと襲おそをおぼんとおぼ為な  
るおぼの風説ふうせつあるおぼのおぼをおぼまおぼらおぼずおぼ酒井左衛門尉殿さうゐさゑんのゐらじのへおぼ

預あけおぼみおぼるおぼりおぼ新しん徴組てうぐみの浪士なみのしらおぼがおぼ居留地きりうちへおぼ乱入らんりゆう外がい國こく  
館くわんと討うんとおぼ為なるおぼ催めいあるおぼと現然げんぜんなおぼればおぼ當港とうこうみおぼてもおぼ是これ  
と防ふぐおぼの備そまへおぼ最さいちおぼうおぼ然しかるおぼと折角せつかく集ありおぼ若者わかしよのおぼうち  
腕前うでまへ勝かれおぼ分ぶんと京師けいしへおぼ抜出ぬきだされおぼておぼ其その甚しどおぼ迷まじおぼくおぼ殊こと不ふ  
渡辺わたべ吉太郎きちたろうらおぼの無なくおぼ協きやうちおぼねおぼ當金とうきん武場ぶぢやうの教授けうじゆ役やくこの  
議ぎの何分なにぶん請まひおぼき難がたしおぼ京きやう都とと守まもるおぼもおぼ當港とうこうと守まもるおぼも  
詰つりおぼ日本にっぽんのおぼ為ため徳川家とくがわがのおぼためため急務きふのかおぼとと專せん一いつとせ  
ねおぼをおぼ成ならおぼねおぼとと存ぞんトおぼられおぼるおぼ一実いちじつはおぼ沔ひしりおぼのおぼとおぼもおぼあるおぼ



仰あやせらるまども今日こんにちのところで見まれを京師きやうしの景けい  
況きやうの當港とうかうの如ごときりのみ非あらず既すでに眉まゆ毛げへ火ひの附つきと  
るるり天下てんかうの為ため徳川家とくがわの為ためと思おも召めさむ曲まげて相あ摸も  
守まもの意いは従したがひ給たまへと説とれても猶なほ返へん辞じせぬ折せから  
又またも一ひと群ぐんの客きやくが階か子こと上あり来きり隣りんり座ざきへどや  
這い入れを兩上りやうじへ忽たちまち地ち声こゑと竊ひそめ餘よの雜ざ談だんもぞ移うつり  
ける此方こゝの一ひと間まみ身みと竊ひそめ耳みみと澄すまして坐まき居ゐる梅うめの  
帯おびは狭せまく手てふ胸むねさきの痛いたくと押おへ衫あはみ願ねがひ入いると

啼なと溜息なげき吐つき「渡わた辺へさんが今日けふの一度いちどもおんえのそので  
何なに指さしととと案あん下くだられ煎かせんの中なかの辻つじ占うらんと取とて見まる逢あひ  
見まての後のちの心こゝろよりうぶれを往むか昔むかしの物ものと思おもひざりりと言いふ百  
入首いりくびの歌うたがで出でてゐんふ子安村こやすむらで渡わた辺へさんの乳う母むとやらの  
家うちへ降ふり込こめられ嬉うれしい爰こゝとお見まての後のちのけし日ひは  
比ひ較かくれを遇あいね往むか事じの樂たのしみもなうつとけきと物もの  
思おもふことも是これ不ふどふのなうつとと苛たげの世よの  
中なかとと思おもつと戀こひする身みふ誰たれも同おなじんの



勝手で宜く當つて辻占と感心して居るが先刻  
の當つと思ふこの嘘の正の物おとひが湧て  
出るの我知らせと辻占ら夫も附ても渡辺さん  
又遇ひといの今の話の容子で渡辺さんと  
撰り入る京都へ連れて行き剣術の教授かといふ為  
やうと言ふので有らう撰られる程の人と彼様  
と中も成この真事お嬉しいが藝と言ひ氣立と  
言ひ男振りと言ひ吾侪が好む他も好く上方の女

春雨四上二十

ハ男と扱ふり上手とみれを京都へおいての様も成  
たら何様おやう無暗に附て往う否く外聞も  
成る様も有つて悪いハテ何様おとら宜ら  
うト思案も胸と痛むるよりうら下でお松が大  
聲とて「お梅さんお梅さん」

春雨文庫四編卷之上 終



